セカイのことをかんがえる
KOMABA DAY

第 84 号　2026/10/31

「KOMABA DAY」は月に一度実施している日で、世界で起こっている様々な問題に子どもたちが触れる機会を作っています。また、同日は募金箱も設置します。集まった募金は災害などの緊急支援や KOMABA の開校以来、その活動を応援し続けているトータルペインター・ミヤザキケンスケさんのプロジェクト OVER THE WALL に役立てられます。なお楽しみながらの活動を目指しているため、「KOMABA DAY」では講師は私服で授業をし、生徒は授業中の飲食を可としています。

【フランス】全土で再び大規模デモ

「生活費の高騰に数十万人　参加者と警官らが衝突」

フランス全土で 10 月 24 日、前週に続いて生活費の高騰などをめぐる抗議デモが繰り広げられ、計数十万人が参加した。当局によると、一部で衝突が発生し、1300 人以上が逮捕された。デモはおおむね平和的だったが、パリなどいくつかの都市では、警察が催涙ガスや放水銃を使って抗議者らを解散させた。マルセイユではバリケードに火が放たれ、ボルドーでは商店の板が引き剥がされた。

当局は警官約 7 万人を配備し、1 週間前のような規模の暴動や略奪を防ぐことに成功している。内務省によると、24 日の衝突で警官 53 人が負傷した。参加者数は、内務省が推定 41 万人と発表したのに対し、労働組合側は約 80 万人としている。リヨンで催涙ガスに遭った参加者は「150 人くらいいて、ほとんどが中高生と大学生だった」と話した。

パリでデモに加わった 26 歳の女性は BBC に「私たちは黙らされている」と語った。匿名の 10 代の 2 人は、自分たちの世代は政府に見捨てられたと感じていると述べ、「略奪は良くないことだと思う。だが、原因は貧困と警察の暴力だ」と話した。背景には二極化した政治情勢があり、来春には大統領選が控えている。

（BBC ニュース）

燃えるバリケード

放水する警察（パリ）

ことの始まりは、パリ郊外にある高校の生徒と先生が今の教育環境に声を上げたことから始まったそうです。夏休みに、以前 KOMABA で働いていた北山先生がいるパプアニューギニアの学校に遊びに行きました。教室は生徒でたくさんで、エアコン設備などなく、正直フランスの高校生が訴えている環境よりも、ずっと厳しいものだったのではと思います。それでも子どもたちは、本当に楽しそうに、意欲的に勉強していました。だから「フランスの生徒はぜいたくだ」と言いたいわけではありません。どちらにも共通しているのは、「学びたい」という気持ちの強さだと思います。パプアニューギニアの子どもたちは学べることがうれしくて、フランスの高校生は学べないことが悔しい。自分の未来のことを本当に真剣に考えているからこそ出てくる気持ちだと思います。みなさんはどうでしょうか。もし自分の学校から先生がいなくなったら、今の学びの環境がなくなったら、みなさんならどう思いますか？どうしますか？（山本）